

田中順照教授著

「仏教に於ける空と識」

辺 見 宗 範

明治以降のわが国の仏教学は、その言語学的研究、思想的研究、史的研究等の面において、驚異的な発展をとげた。求法と愛知とよ

りなされた先学の業績はまことに輝かしいものがある。しかしながら、それによって、大乘仏教思想の根本構造が余すところなく明らかにしたとは云い難い。何故ならば、大乘仏教思想は、該博な知識をもつて外側から考究して行くよりは、むしろその核心に迫るべき間の鋭さと深さとに比例して、それは逐次その姿を現わして来るからである。核心に迫るべき問とは、その經典乃至論書が「何を説かんとし、いかに説かんとし、何故そうあるか」という内面的理解の仕方において、換言すれば能表現の立場に立って、追求することにはかならない。こうした追求を怠る時、学問的業績が如何に膨大なものであり、輝かしいものであろうと、その根本構造は解明されず、客観的には確実と思われたものも、主体的

には疑わしいものとなって来るに相違ない。

田中教授著「仏教に於ける空と識」を読んで、第一に感ずる特徴は、教授が空と識との核心にひたむきに迫らんとする、求法的熱情と極めて鋭い愛知とである。第二に、叙述的には、時に西洋哲学的表現をもつてなされているが、空と識との理解の仕方は、弁証法などを導入して仏教を西洋哲学の立場より理解するといった仕方ではなく、飽くまで仏教的理解の仕方においてなされていることである。第三に、その仏教的理解の仕方は内面的、能表現的理解の仕方である。それ故「空と識」とが「いかに説かれてゐるか」に終らず、「空と識」とを説く所以をも追求するのであつて、それ故にこそ、龍樹以後の空の発展も明瞭となるし、識をとく中辺分別論と撰論との立場の相違、真諦と玄奘との理解の相違も解明されてくるのである。問題は根源をおさえることであり、根源における能表現的理

解ということである。かかるゆき方は云うべくして困難なことではあるが、田中教授の理解の仕方はまさにかかる方法においてなされている点に特徴をもつと云えよう。

本書は次の各章よりなる。

序……金子大栄先生

第一章、空と識

第二章、空觀の發展

1 龍樹、2 嘉祥、3 天台、4 賢首

第三章、空觀の論理

第四章、三性説の二形態

第五章、撰大乘論に於ける唯識觀

第六章、撰大乘論に於ける阿頼耶識

1 阿頼耶識と如来藏、2 阿頼耶の意義、3 阿頼耶の三相、4 熏習、

5 種子、6 互為因果、7 聞熏習、

第七章、成唯識論に於ける阿頼耶識

1 総叙、2 種子 (1) 種子の六義、

(2) 熏習、(3) 種子生現行、現行熏種子、三法展転因果同時の意義

あとがき：教授

右は教授のかつて日本仏教学会年報、日本印度学仏教学研究、高野山大学論叢、密教文

化、南都仏教、仏教文化研究、その他に発表された諸論文の中から、互に関連するものを選び、一つの体系をなすよう編纂されたものである。本書の最後には「あとがき」が付いており、教授の「空と識」とについて、意のあるところが記されていて、読解の指針となっている。第一章の「空と識」とは、教授の「空と識」とについての結論であり、特に力を注いで執筆されているのが、第二章「空観の発展」と第四章「三性説の二形態」とであるように思われる。

「空観の発展」の論証では、縁起を相依とし、相依を恰も客観的真理のように絶対視するわが国の学界に対し、教授は因待の不可得、縁起の不生の重視を提供される。

龍樹は因待の不可得を燃可燃品で明らかにしている。即ち、火は薪によって火である。換言すれば、薪は火に因待する。もし薪があって火によらないならば、薪を火の因とすることが出来る。然るに薪は自ら薪たることが出来ず、従って火の因たることが出来ない。従って因待は成立せず、火はない。同様にして、薪も火も互に因となることが出来ぬ。互

に因となることが出来ぬならば二因はない。二因のない以上、二果はない。従って因待は成立しない。かくて関係各項の因待は不成立となる。また、長と短とは因待して成立する。因待して成立する以上、因待しない時は成立しない。未だ因待しない時に成立しないならば、長と短とはない。長と短とがないならばどうして因待するか。関係の項が関係によって成り立つならば、他面、関係そのものも関係の項に因待することになる。かくて、因待するものと因待との関係も互に因待して、無限の循環に陥ることが示されている。

原始仏教において、論理的な条件と帰結との関係を示していた縁起が、人間思维の当然のなり行きとして、時間的關係における因果、即ち生成の問題として把握される時、それはいかになるであろうか。観因縁品の主題はここにある。人間の思维の型は、一、異、一即異、非一非異の四つである。これを生成の問題に関連させて示すと、それは「因と果との一（自より生ず）」、「因と果との異（他より生ず）」、「因と果との一にして異（共より生ず）」、「因と果との一にあらず異にあらず（無因より生ず）」の四となる。「共よ

り生ず」は一と異との合成であり、「無因より生ず」は因果の破棄となる故、問題は「自より生ず」と「他より生ず」の二つである。即ち因中有果論（サンクヤの説）と因中無果論（有部の説）とである。もし因と果とが同一であるならば、二者の間に区別はなくなり、新たなものは何も生ぜず、生成の概念は成り立たない。しかし他面、因と果との二者が非連続であるならば、二者は互に外的となり、因は非因となつて、果は無因より生ずることになる。教授は観因縁品を引用し、この両論が共に矛盾を含むことを指摘して、龍樹の思索のあとを説明されて行く。

こうして、龍樹が因待や因果の概念の中に含まれた矛盾を指摘することは、つまり人間の思维の自己矛盾を指摘することであり、思维の關係付けによって把えたものが現象であると同時に、かかる關係付けを超えた実在のあることを示唆しているとし、空の第一の意味は思维の働きによって把えられたものの無を示すことであり、第二の意味は思维を超えた実在の無限定ということである——と、教授は帰結される。また、無限定の実在が限定の無の彼方に求められる時、それは色外の空、

色滅の空となり、無限定でなくなる。無限定は限定の当処に現前しなければならぬ。真の無限定は限定と無限定との対立をも超えたものでなければならぬ。それを示さんとして中が説かれる——と、教授は指摘され、かかる無限定の実在と限定の非存在とは如何に關係するか、これを軸として嘉祥、天台、賢首の思想の核心を解明されてゆく。

中論における因待の論証において、關係各項の因待の不成立、因待するものと因待との關係も互に因待して無限循環に陥る点の指摘。嘉祥以下の空の發展において、空の理解にとすると止揚の思想を導入し易いのであるが、仏教の空の論理は即非の論理であって、止揚のそれではないとする点。賢首の空は五教章と十二門論宗致義記とは異っており、五教章では空が無自性という形相であり、後者では無限定の実在を意味する点、並に五教章における三性説の不透明さは、賢首が玄奘に対して融会の立場をとりながら、しかもそれが玄奘の立場に対する正当な理解からでなく、真諦の立場よりなされている点の指摘——など、教授の論理は極めて鋭い。

次に、わが国の唯識思想研究に見られる特徴の一つは、真諦の訳書が重んぜられ、その理解が唯識思想の本流であるとされ、玄奘の理解が単に護法をうけつぐものとして、更には常識に墮するものとして斥けられることである。しかし、かかる説は少くとも撰論に関する限り一面的であり、真諦の理解は撰論の中辺分別論的理解にはかならず、玄奘こそ撰論の正当なる理解者である——こうしたことを論証されるのが「三性説の二形態」である。これは三訳を対照しつつ、三性論に関する真諦と玄奘との理解の相違を明らかにし、唯識思想における撰論と中辺分別論との相違にまで論及される。

最初に撰論依他性の十一識について、客観的な六境や六根が等しく識と云われる時、その識の意味は如何なるものであるか。それには先ず識のみであることが、経証や理証によって証明されねばならぬ。ただ識のみと云うことは、ただ識るものと識られるものと二つからなる識のみと云うことである。この二つが共に識と名付けられることは、意識の場において一切が表象であり、たとえ超越的と考えられるものと雖も、超越的存在として表

象されたものであると云うことである。これは識を分別する働き（狭義の識）とするのではなく、広義の識として、即ち、識るものと識られるものとの対立として、識を把えているということである。他方、中辺分別論の識は対象と身体と我と識との四つに似て生ずると説かれるもので、この四つの中で、我と識とは対象や身体に対すると、むしろ識る働きの側にあり、その識る働きも識の似現せるものであると説かれている。中辺分別論では、このように識が飽迄も対象となることのない、極限概念としての識を意味している点に特徴をもつ。

ところで、真諦訳世親のみの十一識を似塵識、似根識、似識識、似我識の四つにまよめているが、もしこれが中辺分別論に基くならば、撰論と中辺分別論との立場の相違を見逃したものと云わねばならぬし、少くとも撰論の中辺分別論的理解と云わねばならぬ。真諦によれば、識の対象は識によって投げ出されたものであり、且つ虚構されたものであって、分別性の無である。これに反し、玄奘によれば、識は識るものと識られるものとの対立であり、依他性が所分別である点を説くの

であつて、分別されるものは意識の分別により虚構された相を離れて別に存しないが、虚構されたものと等しく無であると言うのではない。撰論の立場は識の対象は必ず分別性の無であると言くのではなく、むしろ依他性が所分別となることを説かんとするのである。

こうして、教授は唯識思想の二つの大きな流れを把握され、玄奘は撰論本来の立場に立ち、真諦は中辺分別論の立場に立っていることを詳細に解明されてゆき、少くとも撰論に関する限り玄奘の理解が正しく、徒らに真諦の立場に立つて玄奘を非難することの愚を警告される。「撰大乘論に於ける唯識観」、「撰大乘論に於ける阿頼耶識」も「三性説の二形態」と相関連する論文で、虚心に三訳を対照しつつ、真諦偏重の所説を批判しながら、それぞれ撰論の唯識観、阿頼耶識を論述される。

唯識思想の根本的立場を明らかにされ、撰論の三性説、真实性への悟入、阿頼耶識の諸問題等にわたる真諦と玄奘との理解の相違を鋭く追求され、識をば Project と見るか、あるいは志向性の地盤においてとらえ、識るものと識られるものとの対立として見るか——という唯識思想の二つの流れに論及され、真

諦の理解が中辺分別論的理解であることを解明されるあたりは本書の圧巻であろうと思われる。また処々に散見はするものの、今後とも健康を維持されて、何等かの機会に、「空観の発展」のような論述の方法で、《古唯識思想とその発展》の解明を、一に後進指導の意味において、体系的に論述して下さいよう懇願してやまない。

仏教関係の専門書は多数出版されているが、仏教外思想関係の専攻者が読んで得るところ大なるものは案外少い。本書における教授の論理は鋭く、その思索は強靱で、大乘仏教思想の根本構造を明かさんとするものであり、本書はそうした数少い専門書の一つであると云える。

本書は空観と唯識の研究において、現在の高いレベルにある学者の諸説を批判しつつ、空と識との核心に迫ってゆく体裁をとっており、かつてその方面の専攻学者を対象として作られた諸論文を体系的に編纂したものなので、叙述と表現の上において、余りにも簡潔にしほりすぎた嫌いがある。教授もその点を考慮されたのであろうか、第一章「空と識」

で全体を鳥瞰せしめ、更に「あとがき」を付け加えられて、各篇の意のあるところを記されてはいるが、仏教外の学者・教養人が読んでも得るところが多いことを期待されるだけに、同一内容で分量を約二倍とし、文の構成と表現に一段と意を用いられて、難解さの伴う点を補足解説しつつ、より平易に叙述される配慮がほしかったと思われる。京都永田文昌堂発行、定価七〇〇円。

(昭和三八、四、二五)